

追悼碑を守る会からの ごあいさつ

歴史の真実を掘り起こし後世に伝えるために

松代大本営追悼碑を守る会
会長 塩入 隆

松代大本営追悼碑を守る会は、戦後50年の1995年8月に「松代大本営朝鮮人犠牲者追悼平和祈念碑」(追悼碑)を建立しました。追悼碑は、日本の侵略戦争、朝鮮半島植民地支配の加害の歴史を忘却せず継承するためモニュメントです。また、未解明な部分が多い松代大本営工事の真相を掘り起こして、歴史の真実を後世に伝えるために活動しています。

戦後70年以上も経過しているのに、私たち日本人の歴史認識がアジア諸国でたびたび問題となります。これは日本政府や私たち日本人が、過去100年の歴史について十分な国民的な議論を積み上げてこなかったことが原因だろうと思います。また、日本政府が過去の侵略・加害の歴史の真相を十分に検証し、謝罪すべきは謝罪し、戦後補償を誠実に実行していれば、アジア諸国との間に歴史認識をめぐってのあつれきは生まれなかったでしょう。

このパンフレットを読んでいただくことで、松代大本営工事における朝鮮人強制連行・強制労働の歴史を改めて考えるきっかけとなれば幸いです。

2019年1月(2版1刷)発行

松代大本営追悼碑を守る会
[連絡先] 〒380-0838 長野県町 532-3 長野県労働会館
TEL 026-234-2116 FAX 026-234-0641



1995年8月に建立された松代大本営工事での朝鮮人犠牲者を追悼する祈念碑

歴史の真実を見つめて

松代大本営工事解説パンフレット

- CONTENTS
- 松代大本営工事の概要 ● 2
 - 工場の犠牲者 ● 10
 - 強制連行と朝鮮人 ● 4
 - 日本人と松代大本営 ● 11
 - 大本営工事と歴史認識 ● 6
 - 「もうひとつの歴史館・松代」紹介 ● 11
 - 朝鮮人労働者の生活・労働の実態 ● 8
 - 追悼碑を守る会からのごあいさつ

松代大本営追悼碑を守る会

松代大本営工事の概要

- 松代大本営地下壕は、太平洋戦争末期、本土決戦遂行と国体護持のために天皇や軍部、政府機関を移転するため、長野県埴科郡松代町（現・長野市松代町）に掘られた地下坑道の総称です。
- 約13kmに及ぶ巨大地下壕の掘削には地域の労務報国隊や勤労報国隊、学徒・児童まで動員されましたが、その主力として最も危険な労働に従事させられたのは、その数6千人ともいわれる朝鮮人労働者でした。
- 朝鮮人は、以前から日本の建設会社などで

- 働いていた人たちと、新たに朝鮮半島から日本に、官憲などによって強制的に連行されてきた人たちでした。
- 1944年11月11日（いい月いい日にちなんだとのこと）に作業が始められ、翌年1945年8月15日まで突貫工事で全工程の8割が終了しました。
- 「マ工事」（マは松代倉庫の意）と名付けられ、当時の金額で1億円とも2億円（現在の金額で200億～400億円程度）ともいわれる巨費が投じられたそうです。

なぜ信州・松代が選ばれたのか？

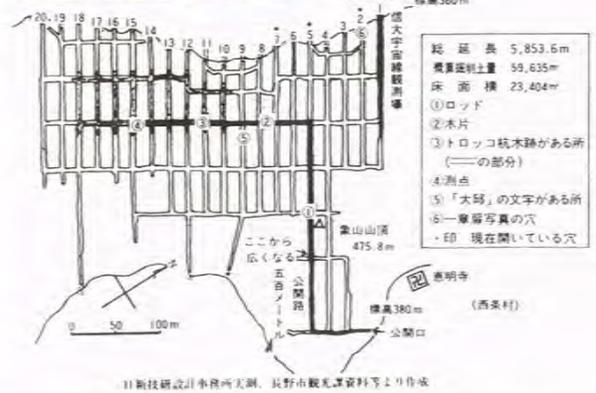
- 長野電鉄、信越線の鉄路があり、物資を送ることができる。
- 信州は「神州」に通じる。皆神山という名前も良い。
- 山の形容も低空爆撃を受けにくい地形である。
- 農村地帯であり、都市に比べれば豊富な労働力が残っている。
- 松代の岩盤は硬く、米軍の10トン爆弾の爆撃にも耐えられる。
- 本州の陸地の最も幅の広いところにあるため、太平洋側・日本海側どちらの海からの攻撃の影響も受けにくく、近く（大豆島村）に飛行場がある。
- 皇居の移転ということを考えれば真田氏の城下町で土地・風土に品格があり、伝統的な土地柄故に秘密情報も漏れにくいだろうと推測された…などの理由によるものと考えられています。

各地下壕の役割

- 象山（イ地区）：政府機関、日本放送協会、中央電話局
- 舞鶴山（ロ地区）：皇居、大本営
- 皆神山（ハ地区）：食糧庫

地下壕の構造図

イ号倉庫（象山地下壕）の構造



ロ号倉庫（大本営）

仮皇居等配置図



松代大本営地下施設・飯場等配置図



強制連行の様子

かじやの親方が、巡査と村の役所のものにつれていかれそうになったとき、弟は、じぶんから身がわりをもうし出たというのです。「親方には病気で寝ていたおかみさんがいましてね。親方と息子が交代でよくめんどろをみておりました。けれど巡査たちは、そんなことにおかまいなく、親方を役所の庭に、むりやりひっぱっていきました。すると、息子とおかみさんが、オンオン泣いておってきました。その息子というのはまだ十三歳で、なりも人一倍小さくてね。それはかわいそうで、見ていられませんでした。あなたの弟さんが走ってきて、なにか巡査にいったのは、そのときでした。なにやら、ずいぶんいいあそびをしておりましたが、そのうちに、巡査は、ぐっと弟さんの首つ玉をつかまえ、われわれがいるほうへつきこらばしてよこしました。

親方はそのかわりに釈放されたけど、われわれのあとを、息子といっしょに、どこまでも、泣いて追ってきました。けれど、われわれがトラックにつめこまれて走り出すと、見るみる小さくなって見えなくなっていきました。

これは和田登の『キムの十字架』という松代大本営地下壕掘削工事にまつわる児童文学作品の一節ですが、歴史事実を色濃く反映しています。

1944年9月、日本政府は国民徴用令による徴用を、朝鮮半島でも開始しました。記録によれば、この徴用は召集令状と同じ重みが

あったといいます。徴用されたのは半島南部の面(村)では、500人程度で、多くは九州・北海道・樺太(サファリン)の炭坑に送られました。

工事初期に松代に連行された2千人余りの人々は、釜山から船で富山県に移送され、トイレもない貨物列車で松代に送り込まれました。

朝鮮併合後の移住移民者

日本が1905年以降、朝鮮半島を保護国化し、1910年(明治43)8月22日、朝鮮国を日本に統合しました。朝鮮を植民地化した日本資本は、古いしきたりを残していた農村で土地を買い占め、小作料徴収を目的として日本の各種農事会社が進出しました。日本資本が買い占めた土地に、日本からの農民が耕作者として入植しました。

この結果、朝鮮農民が農村から追われ、朝

鮮人の一部は日本に渡ってきました。

これらの自主渡航と呼ばれる労務者も、日本資本主義の朝鮮支配の犠牲者であり、決して喜んでの渡航ではなく、日本に行けば仕事があるという、親戚知人の情報からの移民でした。土木工事に従事した朝鮮人は、大手の土建会社に雇われ、独身者は飯場で生活し、炭坑・ダム建設・飛行場の建設などで、日本各地を転々と巡り歩きました。

松代の飯場と朝鮮人

飯場の親方は朝鮮人の同胞でした。賄いは親方の妻や家族が担当していました。松代に送り込まれた3千人~4千人余りの強制連行された労働者は4~10数人ずつ、一つの飯場に送り込まれました。第2次大戦前に日本に渡ってきて結婚した人は、飯場とは別の長屋で生活していました。長屋と飯場の交流は直接にはありませんでしたが、長屋の朝鮮人の子どもは、西条・清野・豊栄などの小学校に通い、これらの学校には転入生徒の名簿が残っています。児童の本籍で見ると、同一地方からの

出身者とは断定できませんが、おそらく縁故関係で渡航してきたと思われる人が多く存在しました。

松代町西条の「杉本飯場」で死亡した「朴道三(パク・トサン)」は1945年3月、慶尚南道昌寧郡大合面場基里で徴用され、釜山→富山→松代のルートで連行されました。強制連行第2陣の5百人の一人でした。朴道三は4月18日に飯場親方の杉本とともに、発破の事故で死亡しました。杉本は釜山出身の同胞でした。

ごつごつした岩がむき出しになっている地下壕。



「追悼碑を守る会」は毎年8月、追悼碑前で朝鮮人犠牲者を慰霊する式典を開いている。



長野市の松代大本営工事の説明文は 朝鮮人強制連行の歴史的事実をあいまいにする「両論併記」

十一月十一日午前十一時着工翌二十年八月十五日の終戦の日まで、およそ九ヶ月の間に当時の金額で二億円の巨費と延べ三百万人の住民及び朝鮮人の人々が労働者として動員され、突貫工事をもって構築したもので全工程の75%が完成した。

ここは地質学的にも堅い岩盤地帯であるばかりでなく、海岸線からも遠く、川中島合戦の古戦場として知られているとおり要害の地である。

長野市は2014年春頃に、説明看板の「強制的に」の表記部分に白テープを張って隠した。

長野市が一方的に修正した大本営工事の説明文

長野市は2014年、市が設置した松代大本営地下壕の説明看板から、建設工事に動員された朝鮮人について従来「強制的に」と表現していた文言に白いテープを張り隠したうえ、市が作成した案内パンフレットも作り直し、同様に「強制的に」動員されたという表現を削除しました。

長野市は2014年夏に報道で問題が明らかになって、庁内に「検討会」を設置、新しい説明文を作成し、関係団体に通告しただけで、一方的に確定稿として公表しました。

新しい説明文は、「必ずしも強制ではなかった」とする見解を併記することで、松代大本営工事に関わる主たる労働力は、朝鮮半島や日本国内の建設現場などから強制的に連行、動

員された朝鮮人労働者であるという歴史的事実を隠ぺいするものです。



象山地下壕の入口

朝鮮人強制連行・労働の歴史的事実の明記を

松代大本営工事の建設に従事した朝鮮人労働者は約6千人と推定され、さまざまな証言や記録から、朝鮮半島や日本国内の建設現場などから強制的に連行・動員された労働者が数多く存在する事実が明らかにされています。これらは、「認識」の問題ではなく厳然たる「歴史的事実」です。この事実を背に向け、「両論」を併記することは歴史をねじ曲げるものです。

追悼碑を守る会と長野市との話し合いの中で、長野市は「議論するつもりはない」と頑なな姿勢で「表現を元に戻すことは考えていない」と強調しています。また、「観光看板なので

歴史には深く立ち入らない」と、長野市がアジアへの侵略と加害の象徴である松代大本営跡を、単に観光資源としてしか見ていない実態も明らかになりました。

長野市の説明文には、真摯に歴史に向き合い、歴史と対話しようとする姿勢が見られません。長野市民はもちろん日本全体、東アジアをはじめとする国際社会に対し、このような市の説明文が通用するとは思えません。

私たち「守る会」は、新しい説明文を撤回し、表現を元通りに戻し、朝鮮人を強制的に連行・動員した歴史的事実を明確に記すことを求めています。

長野市の新しい説明文(抜粋)

この建設には、当時の金額で1億円とも2億円ともいわれる巨費が投じられ、また、労働者として多くの朝鮮や日本の人々が強制的に動員されたと言われています。

なお、このことについては、当時の関係資料が残されていないこともあり、必ずしも全てが強制的ではなかったなど、さまざまな見解があります。

伝言調、両論併記で歴史的事実があいまいにされている。

大本営工事で働いた朝鮮人労働者の証言から

小さな飯場でも、生活や労務管理には
雲泥の差があった様子をうかがわせる証言を紹介しす

イ地区(清野地区)で飯場頭 だった松下鳳煥氏の話

「銭湯には自由に行かせ、食べ物の特配があった。(怪我をさせると責任を問われるので)危ない仕事は自分や熟練者でやった。」

イ地区で削岩の作業に あたった崔小岩さんの話

「食べ物は配給が少なくコーリャン7合に米3合、大豆粒の入った飯に塩汁という食事で、栄養失調で亡くなる人も多かった。現場には監視や用心棒が来て、怪我をしても「こんなことで休んで戦争ができるか!」と脅された。(脱走すると)隠し小屋に閉じ込め、飯を与えない、殴る蹴る、果ては座らせて膝の間にでっかい鉄棒を入れて両端へ人が乗る。骨が折れる音がする。」

鹿島組の下で天皇御座所の建設に 携わった忠清北道出身の 李性国、李浩根、李性欽の三氏の話

「一日三交代より二交代の方が金になった。故郷では一日50銭のところ、松代では悪くても2円にはなった。怪我や病気になれば、すぐ医者に行って軽いうちに治すことができたし、風呂は飯場の中にあった。食事は(1945年4月頃まで)米の飯が好きだけ食べられた。2週間働くとカマス一俵の米がもらえた。」

また、脱走者については正確な数はわかりませんが、戦後に西松組は厚生省の調査に対し「逃亡144名(内官斡旋者107名)」と報告しています。同時に「死者4名」としか報告しておらず、そのまま信用しがたいものがあり、逃亡者の中に死者も含まれていると思われる。

三角兵舎型飯場の外観
屋根が土などでカモフラージュされている



三角兵舎の飯場で集団生活

寝泊まりしていた場所は「三角兵舎」と呼ばれる地べたに屋根がくっついている三角式の粗末なバラックでした。2本の柱を合掌式に組み合わせ、接点をボルトで締めただけのものを地面に何組も並べ、骨組みと骨組みの間に板を張り、掘った土はそのまま屋根にかぶせ、米軍の目をごまかそうと偽装しました。

真ん中が一段掘り下げた通路(幅4~5尺)で両側が寝るところ、頭は通路の方に向けて寝ないと屋根にあたります。

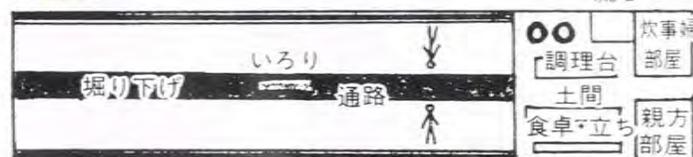
炊事や食事は隣接する平屋でやっていま

した。
イ地区(清野)は水田だったところに建てたので、雨が降るとぬかるみました。

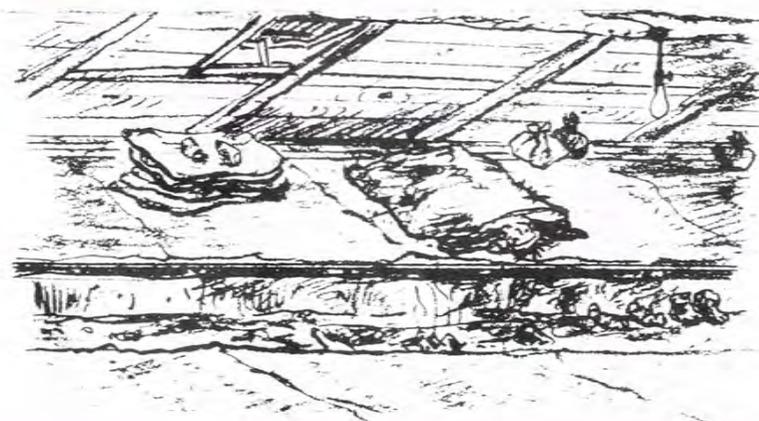
何層もの下請け構造がつくられ、最下層の労務者一人あたりの賃金や食料などは各段階で「手数料」として親方衆がピンハネし、それらが横流しされる一方、最末端にしわ寄せが集まる構図となりました。その中でも技能もなく体力の劣る一番立場の弱いコリアンに厳しい労働がのしかかりました。

三角兵舎飯場の様子を示したイラスト

平面図



内部の生活



出典：蒼き岩陰の祈り—松代大本営朝鮮人犠牲者追悼平和祈念碑建立記念誌—

犠牲者は100～300名ほどと推定



故 朴道三氏

| | | | | | |
|-----|------------|---|---|-----|-----|
| 父 | 生年月日 | 名 | 姓 | 母 | 父 |
| 朴外貞 | 大正十一年八月廿七日 | 道 | 三 | 朴外貞 | 朴外貞 |
| 休季貞 | | | | | |
| 出生別 | | | | 出生別 | |
| 朴女本 | | | | 朴男本 | |

朴道三氏の除籍簿

極秘裏にすすめられた工事だったため、いつ、誰が、どのように亡くなったのか、文書では「1946年厚生省調査報告書」に西松組で4名死亡とあるのみで、後は推定の域を出ません。

証言など（『松代大本宮』林えいだい著、『岩陰の語り』当会編）から、イ、ロ、ハ地区と御座所を合わせて朝鮮人の犠牲者は100～300人程ではないか、と当会は推定しています。

工事に従事した姜永漢氏（岐阜市）は、自分の飯場で爆発事故で死亡した飯場頭の趙徳秀、連行されてきた朴道三、金快述の名前を憶えていると証言しています。姜永漢氏自身も発破で足指を負傷し、入院しました。

「大変だ」と言って担架が運び込まれ、見ると朴道三氏は頭に岩の直撃を受けて脳が飛び出て、趙徳秀氏は背骨が砕けていました。ともに息はなく、金快述氏は全身に岩の破片が突き刺さり呻いていました。

仲間の叫びに対し、西松組の労務担当は「非常時だからしょうがない」と一言答えるだけでした。金快述氏は1週間後に亡くなりました。

象山地下壕に隣接する恵明寺の墓地に埋葬されていた中野次郎氏は日本名しかわからず本名は不明、身内の引き取り手もなく西松組からの要請で埋葬されました。

事故の目撃や埋葬の確認で氏名が判明した人はここにあげた4名のみ、遺族も判明している人は朴道三氏一人のみです。

追悼碑を守る会は2005年7月、工事で犠牲となった中野次郎氏の供養塔を恵明寺墓地に建立した。同年9月には、掘り起こした遺骨を韓国の「望郷の丘」（海外で亡くなり身寄りのない人を埋葬する国立墓地）に納めた。写真は中野次郎氏の供養塔。



出典：奮き岩陰の祈り—松代大本宮朝鮮人犠牲者追悼平和祈念碑建立記念誌—

日本人と松代大本宮

1944年秋からいろいろな立場の朝鮮人労働者が松代地域に流入・居住をはじめてから、1945年8月に工事が中止されるまで、地域住民と朝鮮人労働者との関わりや交流がありました。

学徒動員で工事に携わった岡沢由往さん（当時・旧制屋代中学3年生）は、朝鮮人労働者と2人1組になってトロッコ押しをしました。裸電球だけの薄暗い穴の中を朝鮮人労働者が積んでくれたズリ（岩石クズ）を日に10回ぐらい運び出す仕事で、

重労働でした。朝鮮人はトロッコの押し方の要領を教えてくれたり、自分にも岡沢さんと同じぐらいの子どもがいることを話してくれたり、交流があった様子がうかがえます。

また当時、寺尾村（現長野市）東寺尾の館林貞夫さんは、通学路に火葬場があり、1945年春ごろに学校からの帰り道で2回ほどリヤカーで運ばれる朝鮮人労働者の棺を見たと言っています。作業服姿の朝鮮人たちが悲しげに火葬場へ引いていったそうです。

正確な犠牲者や被害状況などははっきりりませんが、戦争によって好むと好まざるにかかわらず巻き込まれていった人の姿があったことは間違いありません。



追悼碑の裏に刻まれた決意

「戦後50年を記して『松代大本宮』建設のために強制連行され、過酷な労働を強いられて亡くなった多くの朝鮮人犠牲者を追悼し、過去の戦争・侵略・加害を深く反省し、友好親善と恒久平和を祈念してこの碑を建立する。」

1995年8月10日

戦争遺跡・松代大本宮の知られざる歴史と出会う「もうひとつの歴史館・松代」

象山地下壕近くに1998年に開館した「もうひとつの歴史館・松代」は、戦時中の松代大本宮地下壕工事に伴う強制連行・強制労働や「慰安所」の事実を踏まえながら、今、ここに生きる「私」につながる過去を見据え、これからどのような未来を紡いでいくのかを考えるきっかけを手渡す—そのような場を目指しています。

歴史館には、当時使われた実物の削岩機、トロッコ、カンテラなどが展示され、地下壕全体図や説明パネルも充実しています。関連書籍も販売中です。館内10分ほどの説明、団体には地下壕のガイドも引き受けています（要予約）。ぜひお気軽にお立ち寄りください。

〒381-1232 長野市松代町西条 479-13 電話/Fax: 026-278-7746 開館時間: 10時～16時
定休日: 火曜日 冬期休館: 11月下旬～3月下旬 料金: 一般200円 中高生150円 小学生100円